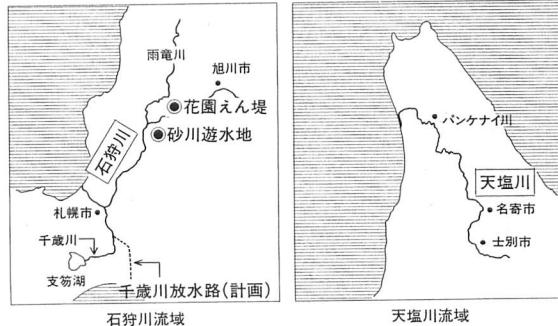


# 破壊した環境の復元こそ急務

「直線化の思想」に終止符打ち  
自然の営みに学ぶ公共事業を

ルボライター  
滝川康治



天塩川流域



メディアが報じている。千歳川流域の治水対策は必要」との認識では賛否双方とも一致しているが、開発庁(局)が放水路計画の撤回を口にしない現状では、同流域の当面の治水対策すら満足に進んでいない。

放水路論争で気になるのは、登場人物がいつも同じ顔触れなのに加えて、「石狩川本流の治水対策をどうするのか?」をめぐる議論が少ないことだ。また、環境問題と治水対策がまるで別物の、対立する図式として伝える報道

のあり方もおかしい。

洪水時に石狩川の水位が高くなることが、千歳川の氾濫の大きな要因である。

流域の開発や河道のショートカットなどで排水路化した石狩川は、濁水流が一気に流れ下り、千歳川に押し寄せれる。だから、石狩川の流量の抑制が治水対策の要諦といえる(もちろんお盆の底のようになっている千歳川中流域の内水氾濫対策は別に必要だ)。そのためには、川を直線化して短時間に水を抜く手法ではなく、蛇行部を復元したり、遊水地を確保するなど、自然環境にマッチした治水対策が有効だろう。

「環境保全」と「治水」は、決して対立する図式ではない。

「世界各国の地域開発法のなかで、地域住民の生活向上をうたつていらないのは、北海道開発法だけであろう」と、自署のなかで看破したのは民族学者の梅棹忠夫氏である。三十七年も前のことの指摘は、戦後の北海道開発がもつ本質的な矛盾(住民不在)をズバ

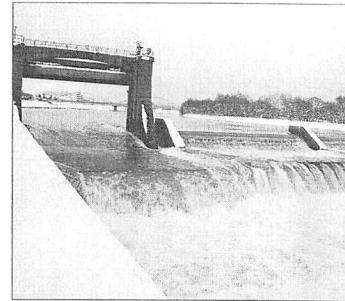
「55年体制」が育てた硬直官庁

同法に基づいて一九五〇年に道開発

府が設置され、その出先機関として開発局が誕生した。そこには、社会党の田中知事に開発事業を任せられないの

で、保守官政府が直接予算を分捕る——党利党略がうごめいていた。道側は中央集権化に強く反発したが、押し切られた。開発局の誕生で北海道は政

「55年体制」から生まれた北海道開発庁が統廃合の見通しになり、懸案の千歳川放水路計画も見直しの流れが強まっている。川を直線化して排水路にする事業の進め方は時代遅れであり、失われた自然環境を復元する事業こそ急務だ。いくつかの河川事業を検証しつつ、復元のための課題を考える。



ようやく魚道が造られることになった石狩川の花園堰堤(深川市内で)

建設省が本年度調査費の半額を執行凍結したこと、事業見直しの方向が決定的になった千歳川放水路計画。河水を逆流させる自然環境の大がかりな「外科手術」よりも、石狩川水系の総合的な治水対策を進めながら環境や人々の生活を守る道があつただけに、今回の見直しは当然の流れである。

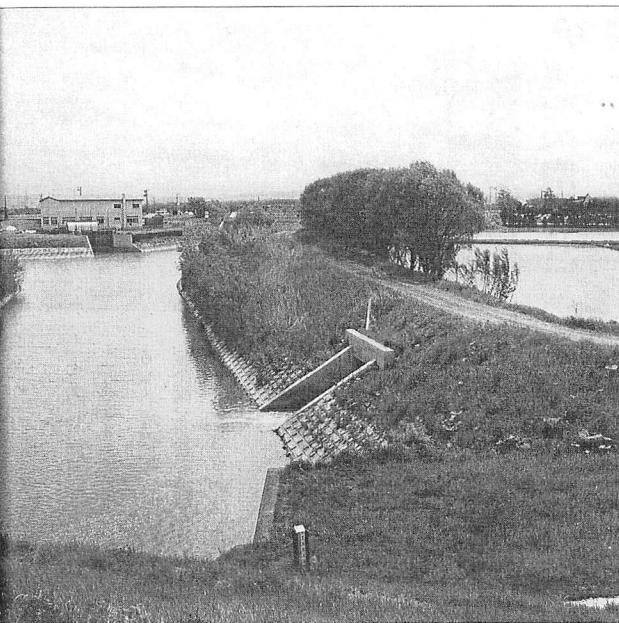
放水路問題を何度かりポート(本連

載PART2など)してきた、わたしの目には、この計画は柔軟さを欠いたの目には、この計画は柔軟さを欠いた開発局(局)河川事業を最も象徴したもの、と映る。

「ボタンの掛け違い」は、八〇年代初めにまでさかのぼる。日本海に流れ込む千歳川の水を運河で太平洋に導く構想は戦前からあつたが、あまりにも壮大な話だけに本音で

取り組まることなく、長い歳月が流れた。しかし、八一年八月に起きた観測史上最大の洪水をきっかけに構想が再燃し、翌年の河川審議会(建設大臣の諮問機関)で「太平洋放水路」を盛り込んだ基本計画が決まった。より具体的な話として急浮上したのは八四年、のちに汚職事件で有罪判決を受ける稲村左近四郎氏(故人)が道新は「これだけの大事業ですから、もっと着実に計画を練り上げる時間がほしかった」(同庁中堅職員)「長官発言は)あまりに唐突な印象を受けた」同氏は当初、放水路構想の存在を知らないかった。国会質疑の準備をするうちに構想を聞いて、「立派なプランがあるのではないか。来年度予算編成に向けて、さつそく具体化に取り組め」と号令をかけた。政治家の思いつきだ。当時の道新は「これだけの大事業ですから、もっと着実に計画を練り上げる時間がほしかった」(同庁OB)と、関係者の困惑の声を報じている。目玉事業を手に実績をつくりたい政治家が主導し、行政内部の十分な詰めもなく急発進したのが過ちはっきりだつた。

その後の十数年の軌跡は、いろんな開発局官のときだつた。



千歳川放水路の起点となる予定だった大学排水路。天塩川水系パンケナイ川のAGS事業——魚は上れるようになっているが、河畔林がほとんどない(左上)

1997.8.

THE HOPPO JOURNAL

## 柔軟さを欠いた放水路の15年



ない、河川改修工事を実施する——と  
いうのが、この事業の目的とされる。

道北の中川町内を流れるパンケナイ

川に、この事業の施工例がある。川の  
そばにはサケ・マス孵化場があり、も  
うすぐで本流の天塩川へ注ぐ場所。魚  
道付きの床止めなどを施し、丸太を使つ  
た護岸、木製の枠に自然石を置いたと  
ころ……。自然に配慮した、と言わん  
ばかりである。河川敷は公園になって

いて、東屋や遊具、ツツジの植栽など  
を配している。

が、どうも不自然なのだ。河畔林が  
ほとんどの生えているのは外来種  
の牧草、誰かが実を植えたのか護岸の  
隙間にはカラマツが育っていた。元の  
自然環境に復元していく、という視点  
が欠けている。設計・施工した担当者  
は努力したのだろうが「木を見て森を  
見ない」式の工事に見える。

## 開発側の都合優先をやめよ!

観光施設と抱き合せの遊水池、カ  
ヌーポート、一部のAGSのような、  
人間の都合に合わせて河川をいじる仕  
事ではなく、開発のなかで破壊してし  
まつた自然環境を復元する営みこそ、  
これから北海道の河川事業がめざす  
方向ではないか。必要性が乏しくなつ  
た砂防ダムや堰を撤去する(無理な場  
合は魚道を整備する)、河畔林を育てる、  
川の蛇行を戻してやる、シンプルな遊  
水池を造るなど、仕事はいくらで  
もある。時間も金もかかるし、何より  
も知恵を絞ることが求められる。豊か  
な自然環境を取り戻すための投資、と  
思えばいいではないか。

千歳川放水路に象徴される自然をね  
じ歩せる思想が破綻し、開発庁もその  
役割を終えた。そんな過渡期のいま、  
多くの恵みを与えてくれた身近な川を  
取り戻すことこそ、住民と開発行政の  
双方にとっての大きな課題だろう。

川の蛇行を戻してやる、シンプルな遊  
水池を造るなど、仕事はいくらで  
もある。時間も金もかかるし、何より  
も知恵を絞ることが求められる。豊か  
な自然環境を取り戻すための投資、と  
思えばいいではないか。

機械力を駆使して、速く、真っ直ぐ  
にという手法は、もう時代遅れになつ  
ている。わずかな洪水調節のためにダ  
ムを建設したり、河川敷にゴルフ場や  
市街地にあるような公園を造る、といつ  
た考え方も改めるべきだ。「川をどうし  
ていくか」を河川技術者に任せてしまつ  
た、住民の側の無関心や依存心も反省  
した方がいい。